

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第61号

● Contents ●

Topic: A Study of the Classical Books in Northeast Asia.	(ISOBE Akira)	1
Northeast Asian Reports: CNEAS Symposium 2013 "Views through a Veil: an Anthropological Analysis of Daily Life in North Korea".	(SEGAWA Masahisa)	2
Special Edition: Encounter with CNEAS.	(POLOVINKA Mariya)	3
Members' Forum: Negative Historical Heritage and Tourism.	(KIM Hyeon-jeong)	4



典籍文化と東北アジア

東北大学 東北アジア研究センター教授
(中国研究分野)
磯部 彰



古代より、東アジア及び東北・東南アジア世界では、様々な人々が地域に根ざした活動を行ない、その情報は主に漢字によって後世に伝えられていた。しかし、漢字による書籍は中国の黄河・長江に政権を樹立した主に漢民族によって作られ、記述も漢民族の視点から行なわれることが多かったため、必ずしも公正に東ユーラシアの人々の総意を正確に留めるとは言いがたい。更に、古代の帛書や木簡・竹簡から写本、そして木版技術による印刷へと情報伝達システムが合理的変貌を遂げる過程で、その記録内容にも変化が生じた。典籍とは、主に、古代の写本から近世の印刷物の総称ではあるが、単に書籍や本を意味するのではなく、広くは絵画資料も含み、簡単に言えば、近代以前の歴史・文化・思想などに多大な影響を及ぼした書物などを指し、書物の場合、同一の書物であったとしても、誤字脱字の少ない原本に近い本を指す。つまり、典籍自体は文化遺産で、写本されたり、印刷されたりした時から、歴代の人々の手加わり、更に戦火などの人災、時に気候変動の天災等を受けて来ている。

当方の研究ユニットでは、東北アジアの研究に有用な宋元版と呼ばれる古木版本、明清時代の小説・戯曲から清朝熱河離宮を描いた宮殿画、乾隆帝のジュンガル部平定を記念してフランスへ発注した得勝図という銅版画(写真1)など、様々なジャンルの資料をデータベース化して公開しつつある(写真2)。しかし、研究資料の場合、典籍は古く、絵画は美しければ良いと言うわけではなく、それらが誕生した理由、或は、伝来した経路を考えて使う必要がある。



写真1. 乾隆帝得勝図(東北大学附属図書館蔵)

つまり、歴史・文化・社会との係わり合いを抜きにしては、研究資料としての価値は大幅に下る。そこに、古典籍を文化財という形で、大きく社会変動の中で捉えるための

共同研究をユニットの上に樹立して活動を行なっている。

共同研究は、もともと、文部省の特定領域研究から始まり、日本学術振興会のアジア・アフリカ学術基盤形成事業、そして特別推進研究へと継承して来た15年余に亘る研究の一つの収束点でもある。東アジア出版文化の研究と名づけた典籍文化研究では、文化遺産となった世界的な貴重書、例えば、中村不折旧蔵の西域出土文書類のカラー複製本を製作し、国内・国外400箇所以上に配布した。出版文化研究については、国内から百余名、海外10ヶ国からおおよそ百名の研究者を招聘し、学際的な国際型研究を進めて来た。

これまでの研究活動の成果の一部を紹介すれば、昨年、大阪府立中之島図書館蔵の四色鈔本『昇平宝筏』(清・乾隆帝旧蔵)を東北大学出版会(2013年3月、2,912頁)(写真3)から、『三国志演義』の明刊本研究や大聖寺藩旧蔵の漢籍研究、朝鮮版『文選』の研究などを収めた『東アジア典籍文化研究』を東京の塙書房(2013年2月、427頁)から、そして、今年、清朝の宮廷文化と政治的係わり合いを共同研究した成果『清朝宮廷演劇文化の研究』を勉誠出版(2014年2月、672頁)から、それぞれ出版し、古典籍と社会との関係の一端を明らかにした。現在は、山形県上山市の藩校蔵書目録を作成しつつ、戦国大名と典籍との係わり合いを、歴史的文化遺産という視野から着目し、検証中である。



写真2. 東アジア出版文化研究資料画像データベース



写真3. 大阪府立中之島図書館蔵『昇平宝筏』

東北アジア通信

東北大学東北アジア研究センターシンポジウム

「ヴェールの向こう側から — 北朝鮮民衆の文化人類学的分析」 (2月15日、片平さくらホール)

東北大学 東北アジア研究センター教授 瀬川 昌久
(中国研究分野)



東北アジア研究センターが例年開催している公開シンポジウムとして、平成25年度は北朝鮮社会の民衆生活の実態把握をテーマとしたシンポジウムを開催した。北朝鮮といえば、東北アジアの重要な一角をなし日本にとって直近の地域にありながら、これまでは学術的な調査研究の及びがたい世界であった。北朝鮮の政治経済体制自体が外国に対し閉ざされた性格をもち、外部の調査者が入れないこと、またわれわれの対北朝鮮への関心のあり方が、政治・軍事的な問題に偏りすぎ、人々の日常的な社会生活の実態には目が向き難いことから、そこには2重のヴェールが覆い被さっているとも言えよう。これらのヴェールを取り去ることは容易ではないが、近年、多様な手段を駆使して先駆的な研究を試みている研究者がおられる。本シンポジウムは、そうした貴重な研究の成果に触れ、現状の分析と今後の研究展開の見通しについて議論を重ねることを目指したものである。

報告者の一人、伊藤亜人・東京大学名誉教授は、長年にわたり韓国社会の文化人類学的な研究を行ってこられたが、最近では中国吉林省での「脱北者」へのインタビュー調査などを通じて、北朝鮮社会の分析にも精力的に取り組んでおられ、その成果の一端を御報告いただいた。次に、自らが「脱北者」としての経験をもち、現在は韓国の北韓学大学院大学校北韓微視研究所研究員ならびにフリーライターとしても活躍されている安鍾秀（アン・ジョンス）先生には、北

朝鮮の人口動態に関する詳細な分析を、御自身の生活体験も交えてお話しいただいた。そして、韓国生まれで現在東北大学大学院教育学研究科准教授として東アジアの移民家族の家庭教育問題などを研究しておられる李仁子（イ・インジャ）先生には、「脱北者」への聞き取り調査をもとに、彼らの「脱北」後の社会適応の現状などについて御報告いただいた。

コメンテーターとしては、聶莉莉（ニエ・リーリー）東京女子大学現代教養学部教授に、主に中国の文化大革命時代の民衆生活との比較を通じたコメントを、また三村光弘・公益財団法人環日本海経済研究所調査研究部長に、北朝鮮社会の経済制度や法規を熟知しておられる立場からのコメントをいただくとともに、報告者を交えた討論を行った。当日は仙台がこの冬2度目の大雪に見舞われた日で、交通機関などに混乱が生じたが、足場の悪い中、数十名の熱心な一般参加者の方々に御来場いただき、質疑にもお加わりいただいた。

とかく政治的な「非難」または「礼賛」の言説や、時事的な新奇性の追究のみに偏りかねないテーマについて、具体的なデータにもとづいて客観的な議論を展開できたことは、大きな成果であったと考えられる。なお、このシンポジウムの内容は、今年度内に東北アジア研究センターより報告書として刊行の予定である。



写真1. 大雪に見舞われた会場の片平さくらホール



写真2. 悪天候にもかかわらず一般参加者にお集まりいただいた会場

東北アジア研究センター主宰のシンポジウム

今後の開催予定のご案内

東北アジア研究センターでは、毎年2月から3月に「東北アジア研究センターシンポジウム」を開催しております。これは、東北アジア研究センターの日頃の研究内容を、国内外の研究者や一般市民の方々に広く公開し、研究上の交流を深めるための公開シンポジウムです。昨年度は「ヴェールの向こう側から—北朝鮮民衆の文化人類学的分析」というテーマで開催しましたが、本年度は2015年2月14日(土)に「東アジアの世界遺産と文化資源」というテーマで開催する予定です。会場は仙台市青葉区の東北大学片平キャンパス内の片平さくらホールです。入場は無料ですので、ご関心をお持ちの方は是非足をお運びください。

また、来年度(平成27年度)は東北アジア研究センター創立20周年の節目に当たるため、記念イベントの一環として、東北アジア地域研究にかかわる一連のシンポジウムの集中開催を行います。開催時期は平成27年12月ころを予定しております。詳しくは後日ホームページやポスター等で広報いたしますが、これらにも是非御参加いただければ幸いです。

Special Edition

「東北アジア研究センターとの出会い」

東北大学 東北アジア研究センター
コラボレーションオフィス 事務補佐員 ポロピンカ・マリア



2013年11月より、東北アジア研究センター(以下、CNEAS)・コラボレーションオフィスの事務補佐員となりましたポロピンカ・マリアです。日本で事務関係のキャリアとしてはこれが初めてです。最初、CNEASの英語・ロシア語が堪能な人材の募集をみて、この仕事をとおして自己実現に挑戦できると思い、非常に興奮しました。採用のお知らせが届き、嬉しいチャンスが与えられたことに深く感謝し、仕事を全うしたいという意欲に燃えました。

私の仕事は、CNEAS・公式ホームページの英語・ロシア語版の更新と作成(翻訳)作業です。ロシア・ノボシビルスク大学と大学院で鉱物学を専攻したので、その時の経験や知識が、CNEASのアカデミックな活動や文章を理解し、適切に訳していくうえでとても役立ちました(写真1)。特に、私のロシアでの専攻と近い地球科学に関連する文章を英語

やロシアに訳した時は、大学で身につけた専門用語や知識を活かすことができ、嬉しかったです。しかし、CNEASでは様々な科学や学際的な研究が行われていて、そういう文書の一部は私にとって多少理解しにくいものでした。しかし、そういう分野の翻訳をとおして新たな情報や知識が身につけられる素晴らしい機会になったと思っています。CNEASの幅広いプロジェクトのうち、私にとって最も印象的だったのは、東日本大震災によって大きな被害を受けた被災地の復興をサポートするものでした。地域社会そのものやユニークな地域文化の立ち直りに尽力する研究者たちの活動に感動しました。

話題を少し変えて、CNEASで一番好きなのは、その独特で快適な職場環境です。仕事を始めるまでは、コミュニケーションの問題、例えば言葉の壁があるのではと思い、緊張していました。しかし、そういう不安は次第になくなり、CNEASで孤独な外国人のように感じることは一度もありませんでした。おそらく同僚たちとのコミュニケーションにはズレもあったと思いますが、同僚たちは驚くほど親切で、喜んで助けてくれる環境でした。

CNEASの同僚やほかの色々な方たちの大きなご支援のおかげで、ホームページの英語版更新(翻訳)を完了させることができました。また現在進行中のロシア語版ホームページも完成に近づいています。今後もその完成をめざして作業を頑張りたいと思います。末尾ながら、本誌で自己紹介のできる機会をいただいたこと、心から嬉しく思います。また、素晴らしい人々ややりがいのある仕事と出会えたことに感謝申し上げます。



写真1. ノボシビルスク大学の学生向け鉱物学
フィールドワーク
(トウヴァ共和国・2006年夏)

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです(不定期)。
今回は、東北大学東北アジア研究センター研究支援部門の金賢貞助教に、「民俗学的方法論によるコミュニティ・ガバナンスの日韓比較研究」を研究している彼女が、特に韓国における日本の植民地遺産の資源化に関する調査の中で出会った興味深い事例について、紹介していただきました。

負の歴史遺産と観光

東北大学 東北アジア研究センター助教 金 賢貞
(日韓比較社会・文化論)



科学研究費助成事業(研究活動スタート支援)により、もともとのフィールドだった韓国・群山のほかに、仁川・木浦・九龍浦で2012年以降調査している。日本人移住漁村の九龍浦を除く3都市は開港場(19世紀末～20世紀初)であり、2000年代以降、植民地期建築物を保存している点で4地域は共通する。さらに、展示が主な目的の博物館や歴史館としての活用という方法も同じだ。しかし、保存中心の仁川や木浦とは対照的に、群山や九龍浦は「近代」「日本」というモチーフを使った観光化も同時に進んでいる。そのうち、群山の保存・活用の規模には目を見張るものがある。



写真1.「群山近代歴史博物館」公式パンフレット(2012年12月入手)

「日本の民俗村」と嘲笑われた群山が「近代文化中心都市」(写真1)に変貌できた大きなきっかけは韓国の文化体育観光部の近代産業遺産芸術創作ベルト造成事業に2008年に選ばれ、09～11年まで総額100億ウォン(約10億円)で実施した近代文化ベルト事業である。その中心事業は3階建ての「群山近代歴史博物館」(写真1)の建設だ。博物館のメインは近代生活館(3階)であり、「収奪」を前面に出す木浦などの歴史館とは異なり、「近代生活」の展示場と銘打っている。しかし、その展示解説や映像から、植民地政府の群山府が「米の群山」というほどの韓国随一の米所群山の重くて暗い過去がテーマなのは明らかだ。当館のほかに、徒歩5～10分内の距離にある



写真2. 記念はがき「旧朝鮮銀行群山支店」(2014年3月入手)
※右上に「近代歴史教育の都市 群山」の文字が見える。



写真3.「古友堂」(2014年3月、著者撮影)
※背後に高層アパートが見える。

旧群山税関、近代建築館(旧朝鮮銀行)、近代美術館(旧日本十八銀行)も、各々特色もあるが、やはり植民地の暗い過去が通底する。要するに、このゾーンは当時代の悲劇が集中的に表象され、考えさせられる「歴史教育」の場なのだ(写真2)。しかし、今年の初春に訪れた私は異様なイメージの並置に驚いた。上記のゾーンを含む近代歴史景観地域の市街地近辺に日本式家屋が体験できる「古友堂」(写真3)というゲストハウスができ、いつも宿泊客でいっぱいだ。この周辺ではうどん、そば、とんかつが食べられ、「佐川」という日本風カフェでくつろげる。また、植民地期の和菓子屋から発展した「李盛堂」というパン屋には名物のあんパンや野菜パンを求めて連日長蛇の列ができる。

群山の近代歴史景観地域には2つの日本がある。植民地時代の日本と没歴史化した日本がそうだ。前者は教えられる実体としての日本であり、後者は想像されるイメージとしての日本だ。この含意的で興味深い現象をどう解釈すべきか、韓国人の友人と議論した。彼は「韓国人のコンプレックスだろう」という。コンプレックスが一般に使われる「劣等感」ではなく、「情緒的に強く色づけされた表象が複合した心理」を意味するなら、一理ある。あるいは、『韓国人の心』で李御寧のいった「恨(ハン)」という情緒、つまり、「雪のように積もる」この感情は簡単には決着がつかず、記憶を刺激するモニュメントなどの装置で繰り返し現れるのかも知れない。見方を変えて『消費社会の神話と構造』でボードリヤールのいった現代社会の擬似環境と擬似モノの世界の遊戯性からも論じられそうだ。その解釈は決して簡単ではないが、今後も実態に沿った考察を続けたい。

今号冒頭の磯部教授の中国典籍文化のお話からは、この研究が大団円に向かいつつあることが読み取れる。瀬川教授の北朝鮮民衆の日常生活に焦点を当てた研究会の報告と、金賢貞助教の韓国の日本関連のテーマパークのお話は、最近の韓国における客船沈没事故の過酷な映像とも重なり合って、この地域と日本との浅からぬ因縁を考えさせる。ポロピンカさんの清新な文章は、センターの将来に希望を感じさせる。(石渡 明)

"Ushitora" is a Japanese word for the "Ox-Tiger"; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》(東北アジア学術交流懇話会ニューズレター) 第61号 2014年6月30日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学東北アジア研究センター気付

PHONE: (022)795-7580 FAX: (022)795-7580

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp